

# サウンドスケープの考え方を活用した 都市環境の価値共有化手法開発のための実践的研究

～日本橋川における船上イベント「名橋たちの音を聴く」を事例として～

## Development of a Method to Share Cultural Values of Urban Environment Based on the Concept of Soundscape: A Case of Listening Event on the Nihonbashi River

●鷺野 宏  
Hiroshi WASHINO  
都市楽師プロジェクト  
Toshigakushi Project

●鳥越 けい子  
Keiko TORIGOE  
青山学院大学  
Aoyama Gakuin University

●山内 悟  
Satoru YAMAUCHI  
エス・シー・アライアンス  
S.C.ALLIANCE Inc.

キーワード：サウンドスケープ, サイトスペシフィック, サウンドエデュケーション, ランドスケープ, 都市環境, 都市の歴史

keywords : soundscape, site-specific, sound-education, landscape, urban environment, urban history

### 1.はじめに

「名橋たちの音を聴く」は、「都市楽師プロジェクト」のアートディレクターをつとめる鷺野宏が、日本橋周辺の都市環境を日本橋川を運行する船上から「音楽」とともに体感することで、都市空間を日常よりセンシティブに味わい街への愛着につなげていくことを意図して企画した作品である。2010年5月より2012年までの3年間、異なる季節にわたり、既に7つのバージョン実施している。

この作品では「歌と語り」を担当する辻康介と共に、第1回より鳥越が「サウンドスケープ解説者」として参加し、その内容は「都市楽師プロジェクト」の他の作品のなかでも、とりわけ「サウンドスケープ」の考え方と深く関連したものとなっている。

R.M.シェーファーは「騒音公害は人間が音を注意深く聴かなくなったときに生じる」とし、騒音問題の原因を現代人の聴取態度の「音楽」への偏向であり「音楽」以外の環境音への閉鎖性にあるとしている。

大都市東京の環境騒音が昼夜を問わず流れ込み、首都高からは車の走行音等が絶えず降り注ぐ日本橋川を会場としたこの作品では、その聴取態度の偏向に注目してプログラムを構成している。つまり、そうした「劣悪な音環境」のなかで敢えて「音楽」を聴く体験などを通して、普段は気づかない都市の音環境を意識化し、それをきっかけとして都市環境をよりリアルに実感する感性を誘発するためのひとつの手法として、その作品を構成している点にこの作品の独自性がある。

本発表では、こうした「名橋たちの音を聴く」の構成やそこで用いたさまざまな工夫を「4つの項目別に考察した手法」として報告する。そこに参加した聴衆たちが音を中心とした都市環境の価値をどのように気づき、それを共有することになっていったかを、参加者がアンケートに記載した文言から検証しつつ、山内悟を中心に現在制作中の「デジタルブック版：名橋たちの音を聴く」（仮題）の映像音響資料を使って報告する。



図1：歴史がヴィジュアルに積層した日本橋川の風景

### 2. 会場と作品の構成

会場の日本橋周辺では、江戸以来の日本の中心的エリアとして約400年の歴史が積層した空間特性を持ち、江戸/明治/高度成長期といった時代の価値観をヴィジュアルに積層した景観としてみる事ができる。

(図1)

この作品の代表的な構成を図2に示す。乗船客は日本橋船着場より乗船し、常盤橋門跡まで上ってから折り返し江戸橋ジャンクションまで下り再び折り返し日本橋をくぐって日本橋船着場に至る約65分間の作品進行図である。マップ上には6つの橋が記載され、数字は経過分数、囲われた数字は音楽を用いたイベントポイント、アルファベットのついた四角は、言葉によるイベントポイント、二重丸はランドマーク、点線は歴史を偲ぶ今は無き水路跡を示している。矢印方向が進行方向となっている。

### 3.手法とその検証

図2の凡例で示されたイベントポイントは、周辺環境に密接に関係させてデザインしたものである。これらのイベントポイントと歴史的な文脈も含めた周辺環境との関係は、一定のルールのもと構成している。そこには、この作品の前提となる「船上からの視点」、2つのイベントポイント「都市の喧噪の中での音楽聴取」と「言葉による解説」、音楽を奏でるタイミングとしての「橋の下の空間体験」という4つの項目に関連したいろいろな工夫がある。

ここではそれらの工夫をそれらの項目別に分けて解説すると共に、2011年9月24日と25日開催の計8便の参加者を対象に、下船後「ご意見・ご感想をお寄せください」との設問のもと、144件の自由記述式のアンケート票に記載されたテキストから包括的に検証していく。表1は、その主な回答例を同様の項目別にまとめたものである。

#### 3.1 船上からの視点

舞台となる日本橋とその周辺の都市環境をより鮮やかに体感するために、非日常性の演出とともに参加者に共通体験をもってもらうため、舞台と観覧席を運河を運行する船上に設定した。

その際重要なのは「都市を体感する感性」を誘発し、景観や音の響きをはじめさまざまな環境要因を参加者にダイレクトに感じさせることである。船自体が屋根で覆われていたり、エンジン音が大きかったりする船は不適切である。そのため、使用する船舶には、甲板が水面に近く屋根のないものを採用した(図1参照)。アンケートへの回答のなかに「頭上の高速道路の切れ間から時折差す光や水の上を吹き上げる風」といった記述が見られるのは、遮蔽物の少ないオープンエアの船を使用する効果を示すものと云える。

運行エリアは、人が集中して観察ができる1時間程度を目安とした。現況の都市景観と都市の歴史のもつ価値への気づきを誘発することが目的であるため、都市史的建築史の特徴が景観的あるいは歴史的に集中的に残っているエリアに限定し、日本橋川の中でも環境的变化に富んだ常盤橋門跡から江戸橋ジャンクション付近までとした。運行ルートの中でも、特に視覚的にも音響的にも劇的な変化が得られる橋を主たるイベントポイントに設定した。

また、座席の視線方向は、船の進行方向ではなく、進行方向を向いて左側に舞台を設定することで、景観的要素への意識の集中をしやすいとした。運行速度については、各イベントポイント毎に、ほぼ停止・ゆっくり・早くの3段階に分けた。

アンケートへの回答には「川面から橋や街はいつもと違った風景に見えた」「水と橋について新たな視点で見ることができた」などの記述がみられることから、「船上からの視点」を利用することは、都市環境を普段より意識的に感じるために有効な手段であると言える。

#### 3.2 喧騒の中での音楽聴取

導入部において、言葉による解説に頼らずに都市の音環境を参加者に自発的に意識化させるために、現況の都市の喧噪の中であえて「音楽」演奏を行い参加者に自然と耳を澄ます機会をつくり、普段意識しない都市の音環境を「自発的に意識化させる」ように誘導した。また、橋の下に入り水面と橋のアーチに囲まれた反響する空間の中で「音楽」の演奏に集中できる状況を提供し、都市の喧噪という都市環境の一要素を感じる感性を高めることを目指した。また楽曲に関しては、橋の意匠や反響、各地点の歴史等との関係のもとに選択をした。

なお「音楽」を供するにあたっては、環境を体感するために音源と反響の関係を分かりやすくするため、さらに音楽の聴取を都市の環境音を対象とした聴取へと拡大させることを意図しているため、その方法は「アコースティック」に限定している。電気的な増幅器を用いないことで、都市の喧噪のためときに音楽が適切に聴取できないことがあったとしても、それが都市環境を体感する機会を提供するものになり得ると考えたのである。

アンケートへの回答には「色々な雑音もおもしろい」「様々な音が一体となって不思議な感覚」「騒音が楽器や声楽をより一層引き立て」等々、都市の環境音と共に聴く音楽の在り方を肯定する記述が多く見られた。静かな環境のなかで音楽を聴いてもらうのではなく、音楽を通じて都市環境を体感させる手法は、概ね成功したようだった。

#### 3.3 言葉による解説

「名橋たちの音を聴く」では、サウンドスケープの考え方に関する解説と、全体を通じたストーリーテラーによる語りという2つの「言葉による解説」を配置している。最も重要なものとして、作品の最初の「音楽」の後の早いタイミングで、この作品の味わい方として、サウンドエデュケーションの基礎的解説をおこない、その後の予期せぬ喧噪をも楽しむ姿勢を促している。

一方、ストーリーテラーによる語りは、場の意味などを文字通り「言葉」で物語るために、全体を通して、現況では見えない建物や掘割あるいは聴こえない音など都市の歴史への想像力を喚起させるための内容とした。ここでは「言葉」による伝達が、効果的であったかどうか問われる。

アンケートへの回答には「いろいろな音を感じることができた」「都市騒音について考えさせられた」など感じ方は様々であるが都市の音環境への注意を喚起させられた旨の記述が目立った。また、「視覚だけではない他の4感を意識して、世界をもっと深く味わえるように自分の感性をみがいていきたい」などサウンドスケープの考え方を受けて、音で都市空間を味わってほしいという趣旨の記述も目立った。これらは「言

語」による解説により、「音楽」と音環境を同時に味わう態度が生まれたものと思われる。

ストーリーテリングに関しては「今まで通り過ぎてきた街の歴史に思いをはせる有意義な時間」「歴史と文化が凝縮されている場所として日本橋を改めて認識」など、境界の歴史を再認識する記述がみられ、多様な切り口で都市空間の価値に気づくための言葉による解説の重要性を再確認した。

なお、これら言葉による解説の実施方法としては、1年目はマイクとスピーカーを使用した。しかし、その音質は環境音の聴取を妨げることが多かったため、2年目からは生声あるいはメガホンでの解説に変更しているが、座席の位置によっては聞こえにくいなど改善すべき点がある。

### 3.4 橋の下の空間体験

作品中、日本橋川を船で移動していくので時間の経過とともに大きな周辺環境の差異があり、参加者は、同じ楽器の放つ音が環境によって聴こえ方が大きく異なることを実感することになる。日本橋川の水位は満潮干潮に左右されるが、平均的に見て水面から橋の下のアーチ空間との間の高さが橋幅に比べて低く反響しやすい空間になっているため、エリア毎のゆるやかな環境の変化とともに視覚的にも聴覚的にも劇的な変化を感じるようになる。(図3)

参加者の反応には、橋の音響への驚きが多く見られた。このような船の移動による強制的な環境変化の中で、参加者に半ば強制的に都市の音への意識の喚起を共通体験として成し遂げようというものとなる。ここでは、橋を通過するタイミングと「音楽」のタイミングこそが、この注意喚起の成功の鍵のように思われた。

そのため、橋を通過する手前から、橋の下の反響ある空間のなかで「音楽」を供するという2つのタイミングを混在させた。音源そのものが発する音の響きを開かれた空間と閉じた空間の2種類で体験でき、より都市環境との呼応を体感できると考えられた。橋の意匠や響きに連動した楽曲を組み合わせたことで、「音楽」を聴取するために高められた都市の音環境を聴取する感性は、やがて意匠等の都市景観であったり風や気温であったり周囲の環境そのものを繊細に体感する感性へと発展するはずである。



図3：橋の下の空間（常磐橋）

アンケートへの回答には「橋の下の反響に感動」「橋の下には驚く効果があって」「橋の下は最高の舞台」など橋の下の音響について言及したもの「橋の下と頭上に何も無い所の響きの違いがおもしろい」など橋の下とそうでない場所との響き方の違いといった橋の下の空間での音楽体験を起点に空間の響の違いについての「気づき」を報告しているものが多数みられた。

「音楽」の演奏を通して聴くと、橋の下とそうでない場所との劇的な音響変化は印象的であったことがうかがえ、都市環境全体への注意喚起として、音楽を奏でるイベントポイントを橋の下あるいは橋の下へ進入する前から始めることとしたことは有効に機能したと考えられる。

### 4 おわりに

「名橋たちの音を聴く」の作品とその実施を通じて、音環境もまた「都市の環境価値」の一部となりうるということが把握されつつある。この作品を今後も継続実施することで、こうした考察をさらに深めると同時に、そこで開発中の手法を日本橋とその周辺以外においても応用することによって、異なる地域の都市の環境価値を比較考察していくことが今後の課題である。

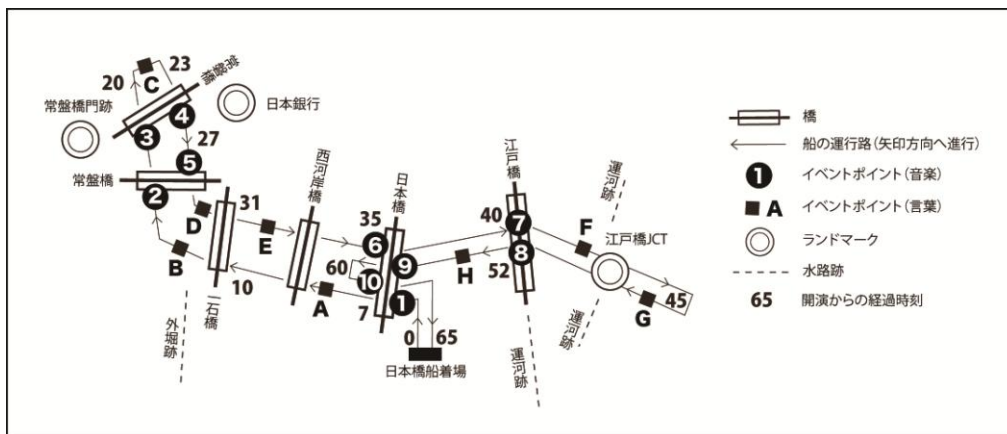


図2：「名橋たちの音を聴く」プログラム構成を図化したもの

- 1) R. マリー・シェーファー（鳥越けい子, 小川博司, 庄野泰子, 田中直子, 若尾裕共訳）：『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』（平凡社、東京、1986）22頁。

表1：手法観点別アンケート結果の抜粋

<p>船上からの視点</p>	<p>川面から橋や街はいつもと違った風景に見えた／水と橋について新たな視点で見ることができ大変有意義な時間／頭上の高速道路の切れ間から時折差す光や水の上を吹き上げる風／雑音の下の一時の川の静寂がなんとも不思議な趣があった。／風のさわやかさや川面がキラキラ光ったり、思っていた以上に“ぜいたく”な時間でした。／日本橋を川から見る風景にとっても気分が舞い上がりました。／舟に乗って移動しながら、音楽を聴いていると、時間の流れがはっきりとわかるのと同時に、独特の“速度”で時が経つのを感しました。</p>
<p>都市の喧騒の中での「音楽」</p>	<p>色々な雑音もおもしろい／様々な音が一体となって不思議な感覚／騒音が楽器や声楽をより一層引き立てていることも新鮮でした。／能楽が演じられたとき、車の音が遠のいて川音が聴こえる気がしたのも印象的でした。／都市のど真ん中で、雑音をBGMとして取り込んでしまう演奏の場というのは、あるようでないということに気付かされました。／フクザツな音に包まれたり、あびたりしながら、都市も自分もまさに“生きている”のだと感しました。高速の騒音は、今回は楽音になっていました。今あるものの中で受け入れて（お互いに）音楽する（生きる）ことが、とても自然だと思います。／騒音や周囲の音がある中で音楽を聴くという行為を能動的に行うと、普段も実際は同じ状態があるはずなのに違って聴こえました。／こんなに真剣に音に集中したことがなく、初めての体験</p>
<p>「言葉」による解説（音関係）</p>	<p>いろいろな音を感じることができた／都市騒音について考えさせられた／視覚だけではない他の4感を意識して、世界をもっと深く味わえるように自分の感性をみがいていきたい。／うるさい音はいつも否定的に言われますが、きょうのように音と共存して生きていく。いろいろ考えさせられた舟旅でした。／高速道路の音も大きいのをあたりまえのように感じていたのも気づかされました。／目を閉じてみると安心できる音、そうでない音のその中で生活していることに気づかされました。／音楽をホールやスタジオの中だけで聴くという固定観念が崩さないといけないなとも思いました。／改めて都市の音、人の声、楽器の響きをしっかりと認識できました。特に目を閉じて音を聴いていると、まわりの音、首都高がゴトゴトいう音やタイヤがこすれる音、エンジン音、川の水音などがまぜこぜになって、一口に騒音といつてかたづけられないほど多様な音があるのだなと気づかされました。</p>
<p>「言葉」による解説（景観や都市史関係）</p>	<p>今まで通り過ぎてきた街の歴史に思いをはせる有意義な時間／歴史と文化が凝縮されている場所として日本橋を改めて認識／目を閉じていると、江戸時代にタイムスリップしたかのような感覚をほんの少しか味わうことができた／橋の説明を聞きながら船に乗ることで、今まで通り過ぎていた街の歴史にも思いをはせる有意義な時間に</p>
<p>橋の下の空間体験</p>	<p>橋の下の反響に感動／橋の下というのはなんと驚く効果があって動く能舞台で演奏を聴くことができ幸せです。／橋の下は最高の舞台／橋の下と頭上に何も無い所の響きの違いがおもしろい。／普段は見られない橋の下、聞き過ぎてしまう音を体験できてとても良かった。／屋外の素敵なホール（橋下）に新しい感動「日本橋にこのような空間があった事は発見でした。この音響空間でもっといろんな音色が聴きたい／不思議な音空間でのコンサートは貴重な体験／橋の下に入る前には騒音でしかなかった自動車の音が、橋の下に入ったとたん聖堂の中に響くバグパイプと声楽のバックミュージックのように聞こえてくるのが不思議</p>
<p>その他・複合</p>	<p>目をつぶると、音だけでなく、川のおい、舟のゆれ、風向きの変化など五感がとぎすまされていくことがわかりました。初めての体験ばかりでした。／目をつぶって聴いた笛の音が頭の中に残って、今は普段はあまり音や情緒を感じることもない日本橋ですが、これからは江戸時代を思い起こす、私の心の音となりそう／仕事でいつも見ている日本橋とはまた違った世界が見れました。／多元的な現実にかかわる人間の体験として今日の日のツアー旅を大切にしていきたい。／都市文化、音楽共新しい発見がいっぱいありました。／今日は日本橋の新発見がたくさんありました。／普段よく通るところですが、別世界に迷い込みとても不思議な雰囲気／高速道路がいかにも景観を壊しているかを実感</p>